MEMENTO=VITA VESTIGIA VITAE

ARCHIVE
// 005

遊撃兵

エヴァ

Skirmisher
Eva Solis
Age / 22

私たちは、
幼いころから
父の背中を見て育った

SECTOR VITA
UNDER GROUND
X - 782.51
Y - 414.62
LAST RECORD
17:00:00
SIGNAL STATUS
ALIVE



PROFILE

統括官の娘として生まれ、人間の兵士として前線で戦果を重ねてきた。
託生者となった後も、その選択を疑うことなく、人類のために戦い続けている。

キャラクターブック

ストーリー （公開情報）

数百年前、アンドロイド産業は飛躍的な発展を遂げた。
開発者のアンディ博士は、人類とアンドロイドが共存する夢を見て、人間に限りなく近いアンドロイドを生み出した。だが、アンドロイドはやがて思想の違いから二つの派閥に分かれる。

人類との共存を望む穏健派と、人類そのものを否定し、滅ぼすべき存在とみなす過激派である。
穏健派アンドロイドは、人間と見分けのつかない外見、そして、共存を望む平和な意志。
彼らは人間との争いを避けるために、人類の前から姿を消した。

過激派アンドロイドは、人間の外見を捨て、強硬な意志を持ち、人類との戦争を選んだ。
激しい戦いの末、この戦争は人類の勝利で終結したと記録されている。
戦争の終結後、長い沈黙を経て、穏健派アンドロイドは再び人類の前に姿を現した。

そして 2XXX 年――人類と穏健派アンドロイドの間で、ついに正式な共存協定が結ばれた。
そして、人類と穏健派アンドロイドによる連合組織《ユニオン》が発足する。
だが、その瞬間を境に、世界は再び崩れ始めた。

協定の成立、そしてユニオンの結成とほぼ同時に、過激派アンドロイドによる全面攻撃が開始されたのだ。――敗北したはずの過激派アンドロイドたちは、滅びていなかった。
彼らは長い年月、影に潜みながら、その機会を窺っていたのだ。

穏健派アンドロイドはユニオンの一員として人類に協力し、過激派アンドロイドとの《第二次アンドロイド戦争》に突入した。その戦いの中で大量破壊兵器が使用され、地上環境は急速に汚染された。
都市は崩壊し、多くの人命が失われる。生き残った人類は、わずか一億にまで減少した。

限られた資源、減り続ける兵力。この戦争を生き延び、そして勝利するために、
ユニオンは新たな生命を創造するという選択に踏み込む。

研究施設《セクター・ヴィータ》。
そこは、ユニオンによって造られた、生命を再構築し、記憶を継承するための領域。
そこで生み出されたのは――人類の意志を宿す、新たな生命《託生者（たくせいしゃ）》だった。

登場人物　（公開情報）



統括官 / ヘクター・ソリス（NPC）：Hector Solis

人間。４５歳。男性。

セクター・ヴィータにおける最高責任者。一般的に『**統括官**』と呼ばれている。主に戦闘指揮を担い、兵士一人ひとりの命を背負う立場として、可能な限り犠牲を抑えることを責務としてきた。彼にとって、穏健派アンドロイドの生命もまた、人間と同等の価値である。しかし、人類存続のためであれば、冷酷な決断を下すことも厭わない覚悟を持っていた。



ルピナス（NPC）：Lupinus

穏健派アンドロイド。製造から数十年が経過している。女性型。

セクター・ヴィータでは統括官の補佐を務めると同時に、穏健派アンドロイド全体を束ねる指導者的立場にある。主に施設の管理・制御を担う。人類との共存を望む穏健派アンドロイドの意志を受け継ぎ、その象徴として創られた存在。

数年前に身体を損傷したが、資源不足により修復は不可能。

そのため、現在は生命維持ポッドの中で過ごしており、連絡を取る際はモニター越しに通信を行う。



研究者 / アレク・ヴァレン：Alec Valen

４５歳。男性。一人称は「わたし」

《託生者創造計画》を主導した人物であり、計画の立案から実行までを担った科学者。託生者の創造技術と倫理構築、その両面に深く関わっている。



カウンセラー / バーバラ・ロウ：Barbara Rowe

２０歳。女性。一人称は「わたし」

ユニオンの兵士および託生者の情報記録を管理する担当者。

戦闘記録や個体データの整理に加え、戦場に立つ者たちの精神を支える役割も担っている。

登場人物　（公開情報）



オペレーター / クララ・ヴァレン：Clara Valen

２０歳。女性。一人称は「わたし」

セクター・ヴィータのオペレーターを務める非戦闘要員。

戦闘能力は持たないが、統括官の指揮のもと、戦場に展開する兵士へ情報・命令を伝達し、後方から作戦を支えている。



突撃兵 / ディーン・カルダー：Dean Calder

40歳。男性。一人称は「俺」

戦闘能力を備えた最初の託生者として誕生し、数多の戦場で成果を残してきた存在。セクター・ヴィータの象徴的戦力であり、勝利の要でもある。

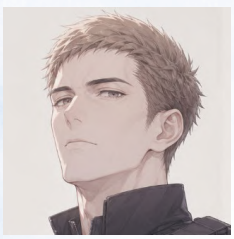


遊撃兵 / エヴァ・ソリス：Eva Solis

２２歳。女性。一人称は「わたし」

統括官の娘として生まれ、人間の兵士として前線で戦果を重ねてきた。

託生者となった後も、その選択を疑うことなく、人類のために戦い続けている。



工作員 / フリッツ・クライン：Fritz Klein

２０歳。男性。一人称は「俺」

前線で戦うことは少なく、主に偵察や潜入など、影から戦場を支える任務を担っている。その判断と行動は、多くの戦況を左右してきた。



参謀 / グレイ・ノア：Gray Noah

２２歳。男性。一人称は「僕」

極めて高い情報処理能力を備え、変化する戦場の状況に即応できる。統括官の指示が届かない現場においても、自ら判断を下し、その選択によって多くの仲間の命を救ってきた。

キャラクター背景

12 年前（10 歳）

父は、勇敢な兵士だった。名はヘクター。後に“統括官”と呼ばれる男である。
五つ年上の姉と私は、幼いころから、そんな父の背中を見て育った。
「ねえ……もうすぐ、戦争が起きるって本当ですか？」
不安げに問いかける母に、父は静かにうなずく。
「あぁ。“過激派”と呼ばれるアンドロイドの軍勢が、勢力を整えているらしい。……おそらく、人類とアンドロイドの共存に関する協定が結ばれれば、本格的に動き出すだろう」
私たちは、ドアの隙間から、その会話を盗み聞きしていた。
私は小さな声で、姉にささやく。
「戦争って、人がいっぱい死ぬんでしょ？……怖いよ」
姉は少しだけ考え、やがて笑った。
「……大丈夫。お父さんが、きっとみんなを救ってくれるよ。もちろん、私だってエヴァを守ってあげる。だって、私はお姉ちゃんだから」
胸に手を当て、誇らしげに言うと、私の頭を優しく撫でてくれた。
私は、そんな姉――エリスのことが、大好きだった。

この世界では、かつて第一次アンドロイド戦争によって、多くの人命が失われた。
私たちの曽祖父も、その戦場に立った一人だと聞いている。家族を守るため、未来を繋ぐために。
今、私たちがここに生きているのは、先祖たちが命を賭して“守る側”に立ち続けたからだ。
そんな家系に生まれた父もまた、その遺志を継いだ。世界の秩序と平和を守るために働く軍人として――そして、再び戦争の気配が濃くなる中、人類のために戦うことを選んだ。

10 年前

2XXX 年――人類と穏健派アンドロイドの間で、ついに正式な共存協定が締結された。両者による連合組織《ユニオン》が発足し、父は軍人として、そして統括官としての地位を与えられた。
そして、父の予想は的中する。共存の宣言とほぼ同時に、戦争は始まった。
過激派アンドロイドとの全面衝突。多くの生命が失われ、アンドロイド同士が保有していた大量破壊兵器によって、地上は急速に汚染されていった。まだ幼かった私たち姉妹は、母に手を引かれ、統合生存圏へと避難することになる。

統合生存圏は、戦争を生き延びた人類が集約され、生活のすべてが一元管理される場所だった。
その外縁では、なおも人類を守るための防衛線が維持され続けている。父はユニオンの要人だ。
その立場ゆえ、私たち家族には中心区画へ優先的に移住する権利が与えられていた。
けれど――私たちはそれを断った。父が前線で戦っているのに、自分たちだけが安全な場所へ行くわけにはいかない。その思いは、家族全員に共通していた。

私たちが選んだのは、統合生存圏の中心から遠く離れた区画だった。
そこは、とても住居と呼べる場所ではなかった。
白線で区切られただけの空間に、人々が押し込められているだけだった。
そして、そこにいる人々の目は虚ろで、生きる希望さえ、薄れているように見えた。

私たち姉妹は、幼いながらも、父の役に立ちたいと本気で思っていた。
父と同じように、誰かを“守れる”ようにと。
けれど、戦闘経験もない子どもにできることなど、何もない。それでも――せめて強くなりたい。
私たちは空き区画で向き合い、ぎこちない組み手を繰り返した。強くなれば、私たちが父を守ってあげられる。そう信じていた。
そんな私たちの様子を知った父は、ユニオンで知り合った穏健派アンドロイド――アイに、私たちの指導を頼んだ。ある日、私たちの前に現れたアイは、穏やかな声で言った。

「君たちが、世界の平和を守ろうとしている勇敢な姉妹だね。統括官から話は聞いている。君たちを、誰にも負けない兵士に育ててあげよう」
そして、わずかに口元を緩めた。アイは女性の姿をしたアンドロイドだったが、その内部は戦闘型に設計されているという。けれど私には、ただ優しい“もう一人の姉”のような存在だった。
彼女は基本的な戦闘技術から戦術知識まで、根気強く教えてくれた。
今思えば、それは本格的な訓練というより、やんちゃすぎる私たちの“お守り”に近かったのかもしれない。アイは、私たちを支え、見守ってくれた。

やがて、統合生存圏に、穏健派アンドロイドが秘密裏に建設していた地下シェルターが人類へ提供された。地上の劣悪な環境に耐えられない人類が優先され、移住は段階的に進められていった。
最初に避難した第一次移住者は、ユニオンの人類側の要人たち。
次に、妊婦をはじめとする保護対象の集団。だが、その日事件が起きた。

地下シェルターへ避難した第一次移住者と第二次移住者、あわせておよそ三千万人が命を落としたという。発表では、地下シェルター内の防衛システムが過激派アンドロイドに掌握され、内部に備えられていた銃火器が暴走、多くの犠牲者を出したらしい。

幸いにも、父はシェルター入口付近にいたらしく、この惨事に巻き込まれることはなかった。
この事件は後に【シェルター制御喪失事件】と呼ばれた。
その後、残された人類の地下シェルター移住が再び始まった。
内部の防衛システムはすべて撤去され、その代わりに、入口の防衛だけが徹底的に強化された。

その日、私は姉と一緒に配給所へ向かった。長い列ができている。
ID を確認され、家族分の食糧が入ったカゴを受け取った。
けれど、帰る途中で、私はつまずいてしまった。——しまった！せめて、食糧だけは！
必死に体勢を立て直したが、パンが一つ、ころりと地面に転がり落ちる。
「あぁ！私のパンが！」
……呆然と立ち尽くす私に、そっと手が差し伸べられた。
「大丈夫？」
顔を上げると、知らないおばさんが、優しく微笑んでいた。
「あ、すみません！私、ちょっとおっちょこちょいで……」
照れ隠しに笑う私に、おばさんはしゃがみ込み、パンを拾って手渡してくれる。
そのとき、姉のエリスが慌てて駆け寄り、私の腕を掴んだ。
「もう、大丈夫？怪我してない？」
私は頷くと、ふと違和感に気づいた。手渡されたパンは、汚れていなかったのだ。
「あのっ！」
私が振り返ると、おばさんの姿は、すでに人混みの向こうへ消えていた。
「どうしたの？」と姉が尋ねる。
「…パン、綺麗だったから。たぶん、あのおばさん、自分のパンと交換してくれたんだと思う」
姉は少し黙り込み、それから静かに言った。
「明日、また会えたら——ちゃんとお礼、言いなさいよ」
私は大きく頷いた。

翌日、姉は体調が悪そうだった。そのため、私は一人で配給所へ向かうことになった。
待機列の中に、昨日のおばさんの姿を見つける。私は思わず声をかけた。
「おばさん！昨日は助けていただいて、ありがとうございました！」
おばさんも私に気づき、にこりと笑った。
「怪我はなかった？」
私は大丈夫だとうなずき、昨日のパンの出来事を改めて話した。
「気にしないで。息子が知らないうちに食べちゃってたみたいだから」
そう言って、おばさんは笑った。私たちは他愛もない話をしながら、順番を待っていた。
そのときだった。おばさんの番が来た瞬間、背後から怒鳴り声が響いた。
「こんなんじゃ腹も満たせねぇんだよ！もっとよこせよ！」
振り返ると、大柄な男が鉄パイプを手に、声を荒らげていた。周囲の人々は、誰も目を合わせようとしなかった。私は、思わず一歩前に出る。
「あなたね、配給は分量が決まってるの。少なくても、貰えるだけで感謝しなさいよ！」
怖くはなかった。私は、軍人の娘だ。だが私の言葉を遮るように、男が怒鳴りつける。

「ガキが、うるせぇ！」
さらに一歩、威圧するように近づいてくる。
そのとき、ひとりのお年寄りの男性が、パンを手に、こちらへ歩み寄ってきた。
「まぁまぁ、お兄さん。お嬢さん相手に、そこまでにしなさい。ほら……わしのパンをあげるから、もう――」
その瞬間だった。男は、何の躊躇もなく、お爺さんに向かって鉄パイプを振りかぶり、頭めがけて叩きつけた。鈍い音が響く。お爺さんは、力なく、その場に崩れ落ちた。
あまりに突然の出来事に、頭が、まったく追いつかなかった。
「パン一個で偉そうなジジイだ。……くそっ、地面に落としやがって」
男の吐き捨てるような声が、聞こえる。
私は、倒れたお爺さんのそばに駆け寄り、そっと顔を覗き込んだ。額は割れ、一目でわかった。
――死んでいる。私は、その場から動くことができなくなった。
人の死を、初めて目の前で見た。それが、どうしようもなく怖かった。

男は、こちらを見ると笑った。
「どうした？さっきまでの威勢は……」
鉄パイプを地面に引きずりながら、じりじりと距離を詰めてくる。
私は、身動きが取れなかった。
「こういう、口だけのガキが、一番ムカつくんだよ！」
男が鉄パイプを振り上げる。私は、反射的に目を閉じた。
――鈍い音。さっき聞いたのと、同じ音が、もう一度響いた。けれど、痛みは来なかった。
代わりに、誰かに、やさしく抱きしめられる感触があった。
目を開けると、そこにいたのは、あのおばさんだった。
「……おばさん？」
私の上に覆いかぶさる、彼女の重さ。受け止めきれず、私たちは一緒に地面へ倒れた。
「そこまでだ！全員で抑え込め！」
その声と同時に、警備服を着た男たちが、鉄パイプの男を取り押さえた。
そこへ、父が駆け寄ってきた。私は抱き上げられ、ゆっくりと、その場から離れていく。
「おばさん……おばさん……！」
呼びかけても、彼女が動くことはない。
その手には、汚れたままの、二人分の配給が、力なく握られていた。

先ほどの光景が、どうしても頭から離れなかった。父は、何があったのかを静かに尋ねてきた。
「おばさんが……私を庇って……。となりの、お爺さんも……止めようとしてくれたのに……。私は、口だけで、何も……動くことができなかった……」

父は、少しだけ間を置いてから言った。
「……その二人とは、知り合いだったのか？」
「……おばさんは、優しくて……。明るく笑って……息子がいるって、話してくれて……。
でも、私……知らない。おばさんの名前も、知らない……」
言葉が、途中で途切れる。
「なんで…どうして……。私は…命がけで守ってくれた恩人の、名前すら、知らないの…」
昨日と今日、ほんの少し出会っただけなのに――たった、それだけなのに…。どうして、私を庇ったの？」
父は、私の様子を見て、静かに言った。
「母さんを呼んだから、ここで待っていなさい」
そう言って、震える私の手を、ぎゅっと握ると、父はその場を離れていった。
――しばらくして。迎えに来てくれた母は、何も言わずに、私を抱きしめた。
その腕は、とても、とても温かかった。避難所に戻ると、姉が泣いていた。
「……無事で、よかった」

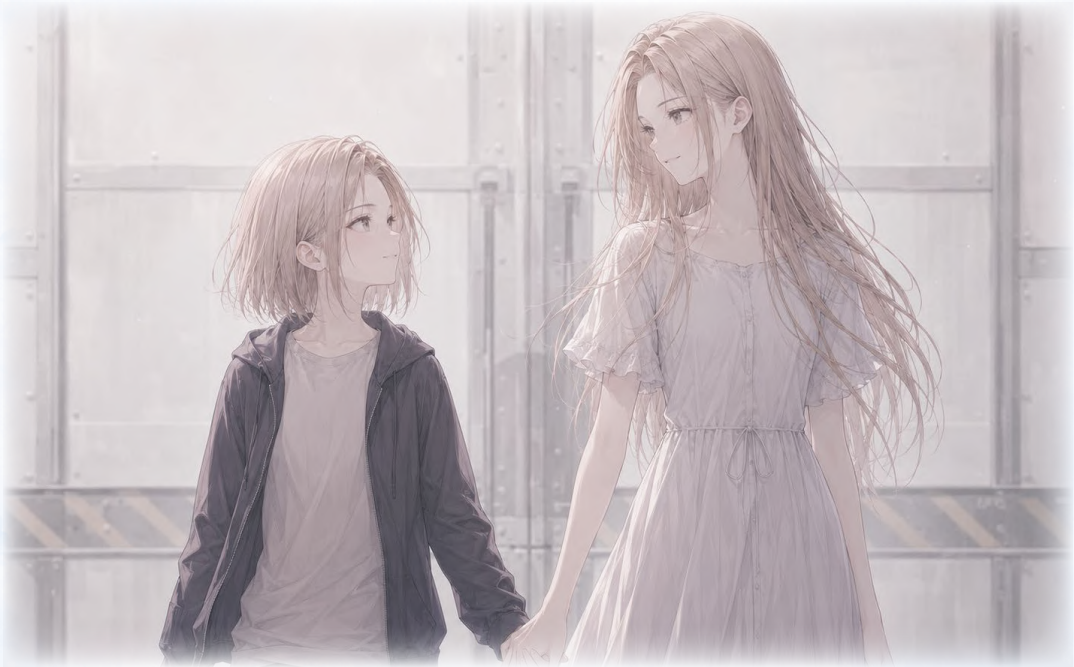
その日の夜、私は姉と並んで空を見上げていた。灰色のスモッグが、夜空を覆っている。
戦争による大気汚染のせいで、空は厚い雲のような煙に閉ざされ、星のひとつも見えない。
空には鈍く濁った闇が広がるだけ。
それでも、私たちはしばらくのあいだ、黙って空を見上げ続けていた。
「ねえ、覚えてる？」姉が、ぽつりと言った。
「戦争が始まる前は、お星さまが、はっきり見えてたんだよ」
「どうだろう……。お姉ちゃんと違って、あんまり興味なかったから」
姉は、少しだけ笑った。
「星の光ってね、何百年も前の光が、今やっと届いてるんだって。…でもね、その中には、もう死んじゃった星もあるらしいの」
私は、姉の話を黙って聞いていた。
「死んだあとでも、誰かのところまで光を届けている。それが、すごく素敵だなって思ってた。でも……こんな戦争が続く世界じゃ、星の光も、ずっと影に隠れたままだね」
姉の言葉を聞いたとき、胸の奥が、ぎゅっと締めつけられた。
私は、あのおばさんのことを思い出していた。名前も知らないまま、私を守って、死んでいった人。
――そんな彼女は、私に何かを残してくれたのだろうか。
姉の言葉と、昼間の光景が、静かに結びつく。

「死んだ人の想いも……こんな世界じゃ、残らないのかな……」
思わず、声がこぼれた。けれど、胸の奥に溜まっていた言葉は、それだけでは収まらなかった。

「ここから遠く離れた戦場では、今日も誰かが死んでいる。何十人も、何百人も……」
私は空を見上げた。少しだけ言葉を探してから、私は続けた。
「その人たちが、どんな想いで生きていたのか……私たちは知ることもできない。ねえ……死んだら、何も残らないのかな？」
姉は少し考え、空に向かって、そっと息を吐いた。
「……残るよ。見えなくも、想いは消えない。形を変えて、誰かの心に残るものだから」
姉は、ゆっくりと言葉を選びながら、話を続けた。
「誰かを守ろうとして、誰かの代わりに立ち止まり、それでも前に進んだ人たちがいた。その想いはきっと、また次の誰かの一歩になるんだよ」
私は、星の見えない夜空を見つめた。見えないだけで、確かにそこにあるのかもしれない。
目を閉じる。おばさんの、最後の表情を思い出す。その唇が、わずかに動いた気がした。
“生きて”。その瞬間、そっと背中を押されたような気がした。

その日の夜、私は姉と共に、母のもとへ向かった。
「エリス、地上に行けば危険がたくさんあるんですよ？」
姉は母に思いを伝えた。
「お母さん、私は地上に行って、誰かを守りたいの。そして、戦争を終わらせて平和だった頃に戻したいの」
母は不安そうに、目を伏せる。そして私の顔を見た。
「エヴァ…、あなたも兵士として戦うの？まだ、幼い子どもなのに…」
私は、姉の手を力強く握りしめた。正直に言えば、不安しかなかった。
地上がどれほど危険な場所かも、戦うことがどれほど恐ろしいかも、私はまだ何も知らない。
それでも、何もできずに待つだけなのは嫌だった。
「……怖いよ。ほんとは、すごく怖い」
母が、はっとしたように私を見る。私はその視線をまっすぐ受け止めて、言った。
「でもね、あのおばさんに救われたんだ。私も同じように、誰かを守りたい」
言葉にした瞬間、胸の奥で何かが静かに定まった気がした。おばさんの表情が浮かぶ。
あの人は、自分の命と引き換えに、私を生かしてくれた。
だったら私は、この命を、ただ守られるためだけに使いたくなかった。
「お姉ちゃんと一緒に行きたい。誰かが死ぬのを、ただ見ているだけは嫌なの」
母はすぐには何も言わなかった。
不安と、悲しみと、迷いが入り混じったような顔で、ただ私たちを見つめていた。
それでも私は、もう目を逸らさなかった。怖くても、進むと決めたのだ。
やがて、母は頷く。そして、私たちを優しく抱きしめてくれた。
「約束してね。必ず、家族みんなで帰ってきて」

やがて地下シェルターへの移住は完了し、私たち家族にも居住区画が与えられた。
だけど、私たちは母と別れを告げ、地上へ向かう。
途中、搬入エレベーターの中で、姉に声をかけられた。
「エヴァも、本当にいいの？」
姉は、私が来るのは反対だったかもしれない。
でも……私はそっと、姉の手を握った。
「後悔はしないよ。自分で、選んだ道だから」
姉は微笑むと、強く手を握り返してくれた。
「私たちで戦争を終わらせて、世界を救っちゃおうね」
私は頷いた。何ができるのかはわからない。
だけど、姉と一緒なら、怖くても前に進める気がした。



父から渡されていた座標データを頼りに辿り着いたのは、《セクター・ヴィータ》。
そこは、統括官である父と、穏健派アンドロイド《ルピナス》が管理するユニオンの研究施設だった。
少年兵に年齢など関係ない。強い意志さえあれば歓迎する――それが父の口癖だった。
施設の中で、最初に私たちを迎えたのは、ひとりのアンドロイドだった。
穏やかな眼差し。その存在は、戦場の空気とはあまりにかけ離れていた。
「ようこそ、セクター・ヴィータへ」
その声は、驚くほど柔らかかった。
ルピナスはその場に屈むと、私たち姉妹の視線に合わせ、そっと頭を撫でた。

「まだ、こんなに幼いのに……。無理は、しないでくださいね？」
その仕草は、人間よりも人間らしくて。私は思わず息を呑んだ。
この人が――穏健派アンドロイド全体を束ねる、指導者的立場の存在。その手は、驚くほど優しい。
彼女は戦いを選んだ私たちを、否定することなく、ただ静かに受け入れてくれた。

５年前
私たちは、部隊の仲間から「まだ子どもだ」とからかわれることもあった。
無理もない。体も小さく、経験も浅い。それでもこの５年間、訓練を重ねるうちに少しずつ認められていった。やがて肩を並べ、同じ戦場に立つ者として扱われるようになった。

私たちは、アイをリーダーとする十名の部隊に配属された。
戦争は長期化し、資源は慢性的に不足している。アンドロイド兵も多くが失われ、かつてのように「壊れたら修理すればいい」という発想は、すでに過去のものとなっていた。一度破壊された機械の体は戻らない。それは、人間の死と何も変わらなかった。
アイは、同胞を失ったとき、私たちと同じように静かに悲しんでいた。声を荒げることもなく、ただ目を伏せ、長い時間をかけて受け止めていた。その姿を見て、私は理解した。
――生命の重さに、種族の違いはないのだと。

そんなある日、父がアイと立ち話をしていた。その隣には、もう一人、見覚えのある男性が立っている。私に気づくと、彼は軽く手を振り、柔らかく笑った。
「やぁ、覚えているかな。戦争が始まる前に、何度か会ったことがあるんだけど……」
「あっ、もしかして……ジェイさんですよね！お久しぶりです！」
目の前の男性――ジェイは、父と近い年齢で、古くからの付き合いがあると聞いていた。
私たちがまだ小さかった頃、父の代わりに遊んでくれたこともある。
彼もまた軍人であり、統括官の“右腕”として頼られている存在だった。

やがてアイとの話を終えた父が、こちらへ歩いてくる。
「……ジェイ、行くぞ。任務だ」
きりっとした表情で言い放つ父だったが、私に気づくと、一瞬だけ動きを止めた。
ジェイが、わざとらしく肩をすくめる。
「統括官、久しぶりに娘さんに会えたんですから、少しくらい、お話ししていけばどうですか？いつも“会いたい”って言っているじゃないですか」
「おい、ジェイ！」父は思わず声を荒げ、わずかに頬を赤くして私の方を向いた。
「……ごほん。その、エヴァ。アイのもとで順調に技術を学んでいるようだな。報告は受けている。父として誇らしい限りだ。…まぁ、怪我だけには気をつけろ。エリスにもそう伝えてくれ」

その不器用な言葉が、たまらなく嬉しかった。
「うん。お父さんも、頑張ってね」
私がそう声をかけると、二人は背を向け、通路を歩き出す。父が小さくジェイを小突く。
ジェイは笑いながら肩をすくめる。その後ろ姿を見ながら、私は思った。
――この二人は、戦場を共に生き抜いてきた、親友なのだと。

3年前

「なぁ、聞いたか？託生者の研究が実用化されて、ディーンが早速成果を上げたらしいぞ」
託生者――それは、人間の身体を生成し、その心臓の代わりにアンドロイドのコアを組み込む技術だ。そして、コアに記録された戦闘技術を、人間の身体で再現する。その話を聞いた瞬間、私は思い出していた。《託生者創造計画》で、クララが、そしてディーンが託生者になったことを。
さらに託生者は、戦場で死んでも終わりではない。コアさえ回収できれば、新しい身体を生成し、再び戦場に立てる。仲間たちは、そのまま話を続けていた。
「つまり、人間をやめて、生き続けるってことか。酷な話だな。アイはどう思う？仕組み的には、アンドロイドの心臓を差し出すようなものだろ」
アイは、少し考えてから静かに答えた。
「私が壊れて、それが誰かのためになるのなら、悪くはないと思う。人間にも臓器提供があるだろう？それと、似たようなものじゃないかな」
「そうか？移植って、そんな簡単な話じゃない。……現場で即座に処置できる状況じゃないと、成立しないことがほとんどだ。少なくとも、その場で死んでいたら、まず間に合わないだろうしな」
私は、ぽかんと口を開けたまま、みんなの話を聞いていた。
なるほど。人体って、不思議だなと思った。

そんな話を聞いた直後、私は初めて託生者ディーンと対面した。
「初めまして！エヴァっていいます！すごい……本当に人間みたいですね！」
託生者という存在を目の前に、私はすっかり興味津々だった。
気づけば、彼の腕や肩にぺたぺたと触れてしまっている。ディーンは、困ったように笑った。その笑顔は、とても自然だった。どこにでもいそうな、少し優しそうな男性。どこか親しみやすい空気をまとっている。彼とは任務のことについて話をしていた。
けれど、ふとした瞬間、笑顔が消える。目だけが、遠くを見ていた。
そのとき。背後から、低い声がした。振り向くと、ジェイさんが腕を組んで立っていた。
「ディーン、そろそろ時間だ。緊張は……まぁ、してないか」
「問題ありません。行きましょうか」
私が「何かあるんですか？」と尋ねると、ジェイは軽く笑った。
「ちょっとした実験だよ」

そう言って、二人は並んで通路の奥へと歩いていく。その背中を見送ったとき、ふと気づいた。
あの先は、通常は封鎖されているはずの区画へ続く通路だった。

半年前

戦争は終わる気配もなく、いまも続いている。圧倒的な資源不足に追い込まれ、私たちは確実に疲弊していた。物資だけではない。ユニオンの人間兵士も、アンドロイド兵士も、戦える者は一人、また一人と消えていく。失われた命は戻らない。そう考えていた。
けれど、現在、セクター・ヴィータにはディーンとグレイ、二人の託生者がいる。
ディーンはアンドロイド側最強の戦闘技術を誇るコアを宿し、グレイは卓越した情報処理能力で、戦場にいながら的確な指揮を執る。そしてディーンとグレイは、何度も戦死し、そのたびに“戻ってきた”。倒れても、コアさえ回収できれば再び立ち上がる。失えば終わりだったこの戦争で、“戻ってくる命”があるという事実は、私たちにとって確かな希望だった。

だが、久しぶりに再会したディーンは、以前とどこか違っていた。あの親しみやすさはある。だが、その奥に、説明のつかない冷たさがあった。彼は気づいていないようだったが、戦場を重ねるたびに、何かが削れているような――それとも、何かを失ったような。その正体は、私にはわからなかった。

順調に任務をこなしていた私たちに、新たな指令が下った。アイと姉、そして私の三人で作戦室に入る。そこには、父――統括官が一人でいた。統括官は任務内容を説明する。
「現在、過激派アンドロイドが、統合生存圏の地下シェルターへ直結する搬入エレベーターの捜索を行っているとの情報があった。この場所が特定されれば、地下へと侵入され、地下シェルター内のユニオンの民間人は、危機に陥るだろう。本任務の目的は、指定座標へ向かい、エレベーター付近に敵が存在した場合は殲滅。そして、防衛を徹底することだ」
アイが眉をひそめた。
「統括官、搬入エレベーターは統合生存圏の中央にある一基だけではないのですか？本当に、この座標にもう一つの搬入エレベーターが？」統括官は一瞬だけ沈黙し、口を開いた。
「ああ。もう一基、存在する。だがその情報を知るのはごく一部の構成員のみだ。地下へ繋がる経路はこの二つだけ。だからこそ、どちらも絶対に守らねばならない。幸い、その一基は通常視認できない構造になっている。すぐに発見されることはないだろう。……だが、敵の捜索は着実に進んでいる。時間の問題だ」
私たちは敬礼し、作戦室を後にした。廊下へ出ようとしたとき、アイだけが父に呼び止められる。私と姉は先に外へ出た。しばらく沈黙が続き、姉がぽつりと言った。
「どうして、もう一つの存在を敵が知っているのかしら」私は肩をすくめる。
「スパイでもいるんじゃない？」
冗談のつもりだった。だが、姉は笑わなかった。空気が、わずかに張り詰める。

やがてアイが出てきた。私は慌てて話題を変える。
「ねぇ、アイ。お父さんと何を話してたの？」
「他愛もない話さ。主に、君たちがどう過ごしているか、だ。……娘のことが心配なのだろう」
「それなら直接話せばいいのに。ねぇ、お姉ちゃん、どう思う？」
姉は小さく肩をすくめた。
「統括官にも立場があるんでしょう。任務中に私情を挟まれても困るし」
そう言いながらも、ほんの少しだけ照れくさそうだった。——あとでからかってやろう。
そう思える程度には、まだ、私は平穏の中にいた。

私たちは、指定された座標地点に到達した。——想定以上の敵の数だ。私はすぐに無線機を取り出し、状況報告を始める。
「こちらエヴァ。敵影多数。想定を上回る規模です」
『こちら、クララ。状況を詳しくお願いします』
クララは、セクター・ヴィータで部隊を支援するオペレーターだ。彼女もまた託生者だが、戦闘型ではないため前線には立たない。——だからこそだろうか。“死んでも戻れる存在”でありながら、安全な場所から指示を出す立場にいることに、彼女がどこか負い目を感じているのを、私は知っていた。
私は息を整え、現状を簡潔に伝える。
「敵は分散配置。搬入エレベーター周辺を捜索しているようです。戦闘は避けられません」
その瞬間、大きな警報音が鳴り響いた。——見つかった。
私たちは即座に配置につき、戦闘を開始した。だが、状況は、急速に悪化していった。仲間が、一人、また一人と倒れていく。この戦力差では、明らかに不利だ。せめて増援を——。誰もが同じ願いを抱いていた。必死に応戦する中、仲間たちの叫び声が、悲鳴へと変わっていく。そのとき、アイのもとに緊急通信が入った。
「こちらアイ。……統括官、今、何と？…それは本当ですか？っ、待ってください。せめて増援だけでも！……っ、そういうことですか。ですが、この部隊には、あなたの娘もいるんですよ！？……了解しました。——必ず。必ず、帰還します」
通信が切れる。アイの表情は、静かに沈んでいた。
「……どうしたの？」私が問いかけた直後、部隊回線が全員に開かれる。
「——アイ部隊より、全員へ。現在、統合生存圏中央の搬入エレベーターが総攻撃されているそうだ。……そして、こちらに増援は来ない。この戦力でこちらの搬入エレベーターを防衛する。敵を殲滅、あるいは撤退を確認するまで持ちこたえろ。……我々に撤退許可は出ていない」
一瞬、静寂が落ちた。
「ま、待ってください！この人数で防衛なんて——できるわけが……」
言葉は、途中で途切れた。誰も続きを言えなかった。
……理解してしまったからだ。——全員が帰還できるわけではない、と。

どれほどの時間、持ちこたえていただろう。過激派アンドロイドからの銃撃は、途切れることがなかった。幸い、敵の増援は多くない。まだこの地点に搬入エレベーターの存在が露見していないからだろうか。そのとき、姉の悲鳴が聞こえた。振り向くと、彼女の腕から血が流れている。撃たれたのだ。銃を構えようとするたびに激痛が走るのか、銃口はゆっくりと下がっていく。
「諦めないで！きっと……もうすぐ、撤退できるから！」私は姉を励ましていた。
けれど、姉は顔を上げなかった。血が止まる気配はなかった。そのとき、近くにアイが現れた。
だが、アイの片目は失われており、一目で状況が深刻だとわかる。
「……くっ。もう、走ることすらできないな……」アイは、周囲を見渡し、低く告げた。
「……私たち以外は、すでに全滅だ。残された手段は……この爆弾で、相打ちするしかないな」
じりじりと、敵が距離を詰めてくる。――この危機を乗り越えられる可能性が、たった一つしかないのなら。私は、それに賭けたかった。私は、アイの手から爆弾を掴み取った。
そして、二人の顔を見る。

「……二人は、生きて。アイ、あなたから教えてもらったこと、今でも覚えているよ。私たちに、戦う術を教えてくれて、ありがとう。……本当の、もう一人のお姉ちゃんだと思ってた」
そして、姉の方を見て、微笑む。
「お姉ちゃん。昔、話した星空のこと、覚えてる？見えなくても、そこにあるって。だから――この戦争を終わらせて、確かめてきて。私の想い、託すから」
私は爆弾を強く握りしめ、走り出した。敵が一瞬、動きを止める。
次の瞬間、弾丸が雨のように飛んできた。――死んだら、どうなるのだろう。恐怖が胸を締めつける。
それでも、足は止まらない。大切な二人を守りたい。ただ、その一心で、前へ、前へと走る。
背後で、姉の叫び声が聞こえた。私は立ち止まり、爆弾を投げつける。
その瞬間――世界は、激しい閃光に包まれた。

……真っ暗な世界。ここは、死後の世界なのだろうか。やがて、ゆっくりと視界が広がる。
目の前に立っているのは――爆弾を握りしめ、飛び出そうとしている、死ぬ直前の“私”だった。
……どうして？疑問は解けないまま、目の前の私は口を開く。
「だから――この戦争を終わらせて、確かめてきて。私の想い、託すから」
その言葉と同時に、彼女は駆け出す。次の瞬間、この身体も勝手に動いていた。
「…それじゃ、ダメなの！」
伸ばした手は、背中に届かない。それでも、必死に追いかける。これは――私の記憶ではない。
――これは、お姉ちゃんの記憶？次の瞬間、感情が、心に流れ込んできた。
恐怖。後悔。止めたかったという、強い願い。そして――守りたい、という想い。
それは、私のものではない。
けれど、確かに、私は姉の想いを感じることができた。

「エリス。――妹を、お前が守ってやれ」
「エリスは、お姉さんとして立派ね。これからも、妹を守ってあげて」
どこからか、両親の声が重なる。その言葉は、ずっと私の誇りだった。
妹を守りたい。そう、心から思っていた。けれど、エヴァはただ守られるだけの子じゃない。
怖くても、自分で決めたことなら前に進もうとする。そんな妹だってことを、私はずっと知っていた。
だからこそ、今ここで背負わせたくなかった。
爆弾を握る手は震えていた。声も、泣きそうなほど揺れていた。
爆弾を投げつけた妹の背中が、ほんの少し揺れる。
私は、妹の腕を掴んだ。強く、離さない。
「それは……エヴァが引き受けることじゃない。…約束したでしょ？私が守ってあげるって。
――だって、私は……」
妹を抱き寄せ、自分の身体で覆った。衝撃が来る。光が世界を塗りつぶす。
爆発とともに、鋭利な金属片が一面に飛び散り、背中に熱さと激痛が走る。
――それでも、私は妹を離さなかった。

「……お姉ちゃん」
目を開くと、そこはセクター・ヴィータの施設内だった。さっきの感覚は、一体何だったのだろう…。
そのとき、「お目覚めかな？」そう声をかけてきたのは、科学者のアレクだった。
動揺する私に、アレクはゆっくりと、状況を説明してくれる。

死にかけていた私は、停止寸前のアイに担がれ、ここまで運ばれてきた。
そして、彼女の意志により、アイのコアが、心臓の代わりとして移植されたのだという。
そして私は、託生者となった。私は、胸に手を当てた。
ぽっかりと穴が空いたみたいに、そこだけが冷たかった。
「……お姉ちゃんは、……どこですか？」
そう問いかけると、アレクは言葉を失った。そのとき、バーバラが部屋に入ってくる。
アレクは無言で、彼女に資料を手渡した。バーバラは一通り目を通し、静かに口を開く。
「……確かに。これで、アイ部隊―エヴァを除く、全員の死亡を確認しました」
私は、耳を疑った。バーバラは、私に気づくと、一歩近づき、深く頭を下げる。
「……お姉さんのこと、心よりお悔やみ申し上げます」
理解できなかった。
「だって……私は、二人を守るために……なんで……どうして……」
そう言いながら、私は自分の手のひらを見る。
――そこには、ひとつの傷も、残っていなかった。
日付が変わる頃、病室のモニターにルピナスの姿が映し出された。

「お久しぶりですね、エヴァ。託生者になったと聞きましたが……体調は大丈夫ですか？」
数年ぶりに見るその姿は、記憶の中と変わらず穏やかだった。
あの頃と同じ声。柔らかな眼差し。ルピナスは私の容体を確認すると、静かに任務の結果を告げた。
搬入エレベーターの防衛は成功したこと。シェルター内の人類は守られたこと。
――だが、その代償はあまりにも大きかったこと。多くの兵士を失った。
その中には、父の親友であるジェイも含まれていた。そして、私とフリッツが、託生者になったのだと。ルピナスはそこで、わずかに言葉を止めた。
そして最後に、彼女は小さく言った。「……ごめんなさい」、と。
私は、その言葉の意味を理解できなかった。

翌日。病室で横たわる私のもとに、バーバラが現れた。ユニオンの兵士の情報記録を管理する担当者――ときにはカウンセラーの役目も担うと、アイから聞いていた。私は、アイ部隊の最後を語った。
バーバラは、後世にみんなの名前を残そうとしていた。溢れそうになる感情を押し殺しながら、私は彼女たちの最期を、ひとつひとつ言葉にする。それが、仲間たちの生きた証になるのだから。

統括官の執務室に、私は無言のまま、部屋に足を踏み入れた。
「エヴァか。無事でよかった」
父―統括官は、椅子から立ち上がり、そう言った。
「……無事なのは、私だけです。……アイ部隊は…全員、戦死しました。――私だって、本当は、あの場所で死ぬはずだった。私がっ……、私が二人を守るはずだったのに！」
胸の奥に溜まっていたものが、溢れ出す。
「それも、これも……っ、お父さんが――命令したんでしょ……？」
戦死した仲間たちの顔が、次々に浮かぶ。悔しさで、手が小さく震えた。
父は顔を伏せたまま、短く答えた。
「そうだ」それだけだった。
否定も、言い訳も、慰めもない。
「……我々も戦っていた。だが、応援は送れず、撤退も許可できなかった」
それが、あなたの判断だというの……？私は唇を噛みしめる。血の味が、広がった。
「……結局。お父さんにとって……私たち“姉妹”は……っ、戦場を動かすための、ただの“駒”に過ぎなかったんだ！！」
本当は、否定してほしかった。“違う”と、たった一言でいい。
だが、父は何も言わず、ただ統括官の目で私を見ていた。
その瞬間、わかった。
ああ――この人は、父ではなく、統括官なのだと。



「お姉ちゃんが……みんなが死んだのは……統括官……っ、全部あなたのせいだ！！」
怒りに任せ、言葉を叩きつける。
それ以上、この部屋にいられなかった。
扉を開けた瞬間、入口でフリッツとぶつかる。何も言えない。
涙を必死に押し殺しながら、私はその場を走り去った。

２ヶ月前
託生者となった私は、新たに部隊のリーダーへ任命された。
あの出来事を経てもなお、私はその責務から逃げようとは思わなかった。
この戦争を終わらせること。
それが、姉やアイ、そして死んでいった仲間たちの想いだから。
……だから、私は戦う。その決意だけは、どれほど時間が過ぎようと、揺らぐことはなかった。

私は託生者として、アイの戦術能力を受け継いだ。
理屈はわからない。ただ、彼女が見せた戦闘技術を、この身体は正確に再現できる。
だが――託生者になったからといって、すべてが変わるわけではない。
人間と変わらないものもある。それは、恐怖だ。
私は死んでも、この特殊な身体を再生できる。だが、痛みは消えない。
迫り来る銃弾。周囲で倒れていく仲間。血と焦げた金属の匂いが混じる戦場。
その中で、恐怖が消えることはなかった。
むしろ――何度も、死を経験したからこそ。“死ぬ”という現実が、誰よりも鮮明になった。
だからこそ、私は変わった。
無謀にはならない。感情に飲まれない。より慎重に。より的確に。
私は、冷静に戦果を積み重ねていった。

3 日前

私はディーンから、緊急任務についての説明を受けていた。
どうやら一週間後、過激派アンドロイドがセクター・ヴィータを含む全セクターへ同時攻撃を仕掛けるらしい。その情報は、フリッツが事前に掴んだものだという。私たちにとって有益な情報だ。
だが、事前にフリッツはそんな情報を、どこで手に入れたんだろうか。
疑問に思っていると、彼は話題を変えるように、不意に問いかけてきた。
「エヴァ。メメント・ヴィータという言葉を知っているか？」
聞いたことのない名称だった。
「知らないよ。何それ？」
だが、ディーンは引き下がらない。
「本当にか？ 一度も聞いたことがないのか？ 統括官の娘なのに？」
その視線は、妙に鋭かった。私は次の任務の準備があり、その場を離れようとした。
だが、突然、手首を強く掴まれた。
「っ……！」
指が食い込む。託生者の握力は、人間のそれとは比べものにならない。
「統括官の娘であるお前も知らないのか……？」
低く、押し殺した声。
「ちょっと、痛いって！」
私の叫びで、ようやく我に返ったのか、ディーンは慌てて手を離した。
「……っ、すまない。気づかなかった」
彼は何度も謝った。だが、その目の奥には、何か焦燥のようなものが揺れていた。

事件当日

あれから、過激派アンドロイドの襲撃に備え、防衛体制は最大限まで引き上げられていた。
託生者の多いセクター・ヴィータでは、各セクターへ戦力を分散。
施設内には最小限の精鋭のみが残り、アンドロイド兵はそれぞれの防衛ラインへ送られていた。
ホールでは、託生者のディーン、フリッツ、グレイとともに、過激派の動きの想定を行っていた。
ディーンは「考えるのは苦手だ」と言いながら、私たちの周囲をランニングしている。
呆れた視線を向けたそのとき、ディーンが足を止めた。
「……なぁ、何か変な匂いがしないか――」
その言葉と同時に、ディーンの体が崩れ落ちた。「息を止めろ！」グレイが即座に叫ぶ。
私たちはアイコンタクトだけで散開した。

廊下へ飛び出すと、すでに兵士たちが倒れている。だが、死んではいなかった。これは、催眠ガス？
しかし、息を止められる時間には限界がある。私はガスマスクを探しに研究室に向かった。

「これをつけて、中に隠れていろ！」
研究室の中から、切羽詰まった声が聞こえた。
私が駆け込むと、部屋の奥でアレクがクララにガスマスクを手渡していた。
続けて彼は、研究室から繋がる小部屋へ、クララを押し込んだ。
アレクが振り返る。その直後、彼の体が大きくふらついた。ガスを吸ってしまったのかもしれない。
その手には、もう一つのガスマスクが握られている。装着が間に合わなかったのだろうか。
アレクは、クララのいる小部屋の扉を塞ぐように、その場で崩れ落ちた。

クララは、アレクの娘のはずだ。彼女を閉じ込めたのは、父親としての判断だったのだろうか。
私の父とは違い、彼は娘を守ろうとしたように見えた。それが……少し、羨ましかった。

そのとき、小部屋の中から扉を叩く音が聞こえた。勢いよく扉が開いた場合を考え、私はアレクの体を少しだけ退ける。だが、おそらく研究室にはガスが充満している。この状況を、クララにどう伝えるべきか……。その瞬間だった。扉が開き、クララが飛び出してくる。
「お父さん、どうしていきなり！ って、あれ、エヴァさん？ どうしてこんな場所に――」
……しまった。彼女の体勢が大きく崩れた。私は咄嗟にクララを受け止める。
クララは意識を失っていた。どちらにしても、彼女に戦闘能力はない。隠れていたほうが安全だろう。

私はクララの手に握られていたガスマスクを、彼女の顔に装着した。続けて、アレクが持っていたガスマスクも、彼の顔に装着する。このガスが一時的なものなのか、致死性のものなのかは分からない。だが、吸い続ければ危険なのは間違いない。装着しておいたほうがいいだろう。
私は予備のマスクを探した。だが、見つからなかった。私が倒れれば、この二人を守れない。
だけど――親子の姿を前にして、そのマスクを奪うことはできなかった。
残った力を振り絞り、私は二人をクララのいた小部屋へ運び込む。そのとき、機械音声が響いた。
「防衛システム起動。防衛システム――」
私は扉を塞ぐように、座り込んだ。
もし過激派が侵入してきても、気づかれない可能性に賭けるしかない。
私が死んでも、アレクがきっと、生き返らせてくれる。……運が良ければ、またね。
もう限界だった。思わず息を吸う。甘い匂いが肺に入り、視界が歪む。
思考が、急速に崩れていく。私は、そのまま意識を失った。

――どれほどの時間、意識を失っていたのだろうか。
ぼんやりとした意識の底で、施設内に響く声が聞こえる。
「ザザッ……みなさん、無事ですか？ こちら、ルピナスです。生存者は、至急メインホールへ招集してください」

過去まとめ

【12 年前】
・エヴァは、父ヘクターと姉エリスを誇りに思いながら育った。父は人類を守る軍人だった。
【10 年前】
・家族は統合生存圏へ避難し、安全な中心区画ではなく、あえて外れの厳しい区域で暮らすことを選ぶ。
・配給所で出会った**名も知らぬおばさん**が、**エヴァを庇って命を落とす**。**エヴァは「救われた命なら、その命で誰かを守りたい」と決意**。
・姉と共に地上へ向かい、**自らの意志でセクター・ヴィータの兵士として生きる道を選ぶ**。
【5 年前】
・アイが部隊長を務める部隊に所属し、少しずつ兵士として認められていく。アイは、エヴァにとって**“もう一人の姉”のような存在**だった。
・父の親友ジェイとも再会し、父が自分たち姉妹を気にかけていることを知る。
【3 年前】
・《**託生者創造計画**》や**託生者ディーン**の存在を知り、戦場の現実に触れていく。
【半年前】
・中央搬入エレベーターとは別に存在する、もう一基の搬入エレベーターを防衛する任務に就く。その存在を知るのは、ごく一部の構成員のみ。任務中、過激派との交戦が始まり、部隊の負傷者が増えていく。しかし、**統括官との通信の結果、アイ部隊は増援も撤退も許されないまま、戦い続けることになる**。
・エヴァは爆弾で道を開こうとするが、その直後、**姉の視点の記憶を見る**。目を覚ますと、自分は**託生者になっていた**。アイもまた、エヴァを救うために**自らのコア**を差し出していた。
・同じ日に、フリッツが託生者になった。
・目覚めた後、**アイ部隊の全滅とジェイの死を知る**。**父が撤退も増援も許可しなかったことを知り、“統括官”に強い怒りを抱く**。
【2 ヶ月前】
・託生者となった後、新たに部隊のリーダーへ任命される。
・姉やアイ、死んでいった仲間たちの想いを背負い、この戦争を終わらせるために戦うと決める。恐怖は消えないが、それでも慎重に、冷静に戦果を重ねていく。
【3 日前】
・ディーンから《メメント・ヴィータ》という言葉を聞くが、その意味は知らない。
【事件当日】
・施設内でガスが散布され、**エヴァは研究室へ向かう**。**アレクがクララにガスマスクを手渡すと、研究室から繋がる小部屋へと押し込んだ**。**倒れた二人にガスマスクを装着し、小部屋へ運ぶ**。
その後、**エヴァはガスを吸い込み、意識を失う**。

用語解説

第二次アンドロイド戦争

現在進行中の、ユニオンと過激派アンドロイドとの戦争の総称。
百年前に発生した第一次アンドロイド戦争は、人類の勝利として歴史に記録されている。
しかし、敗北したはずの過激派は影で勢力を再編し、長い年月をかけて戦力を整えていた。
その結果として勃発した本戦争は、人類と穏健派アンドロイド双方を存続の危機へと追い込んでいる。
開戦から十年が経過した現在も、終結の兆しは見えていない。

託生者

託生者は、人為的に生成された人間の身体に《アンドロイドのコア》を埋め込んだ存在。
託生者はコアに保存された記憶や戦闘技術を再現することができる。
さらに身体が欠損・死滅しても、コアを研究施設《セクター・ヴィータ》へ回収すれば、同一の身体を再生成することが可能である。彼らは汚染された環境にも耐え、死を超えて戦い続ける。
それが、ユニオンが戦争のために創り出した“新たな生命”――託生者だった。

アンドロイドのコア

アンドロイドの心臓部には、《コア》と呼ばれる動力中枢が存在する。
人間の心臓とほぼ同じ大きさを持つこのコアは、アンドロイドの稼働と存在を支える要であり、意識や記憶の基盤でもある。
強度はあるが、銃弾以上の威力を防ぐことはできない。
コアが破壊された場合、記憶のサルベージは技術的に不可能とされている。
すなわち、アンドロイドにとっての「死」である。
――そしてそれは、コアを埋め込まれた存在である《託生者》にとっても、例外ではない。

世界規模ネットワーク

すべてのコアは誕生と同時に《世界規模ネットワーク》へ自動的に接続される構造を持つ。
これは、アンドロイドの開発者、アンディ博士によって設計された。
世界規模ネットワークとの接続は生命維持に必要な最低限の同期・維持処理を行うためのものだが、同時に、全てのコアへ干渉しうる唯一の経路でもある。
数百年を経た現在も、このネットワークは秘密裏に稼働し続けており、アンドロイドはその制約から逃れることができない。

統合生存圏

ユニオンによって建設・管理されている、人類のための巨大生存地域。生き残った人類はここに集約され、生活・生産・防衛のすべてが一元的に管理されている。しかし戦争の長期化により環境は著しく汚染され、作物の生産にも深刻な異常が生じた。地上での生活基盤は次第に維持困難となり、残された資源の大半を投入して、統合生存圏の地下に巨大シェルターが建設された。

現在、多くの人類は地上を放棄し、地下シェルターへ移住している。地下と地上を結ぶ正式な経路は、統合生存圏中央部に設置された搬入エレベーターである。

このエレベーターは地下への唯一の公的出入口であり、過激派アンドロイドから守るべき最重要拠点とされている。だが、その構造のすべてを知る者は、ごく限られている。

現在地上に住んでいるのは、過激派アンドロイドと戦うために地上に残ったユニオンの兵士。

彼らはセクターと呼ばれる拠点で生活している。セクターは統合生存圏地上部に点在し、平時は光学迷彩によって覆われ、敵からの視認を防いでいる。

そしてその中でも最も大きいセクターが託生者を生み出した「セクター・ヴィータ」である。

統合生存圏は、現在において人類が長期的に生存可能とされる、唯一の地域である。

セクター・ヴィータ

最初に建設された最古のセクター。研究棟が追加され、今の名称に変わった。

指定された座標データを用いることでのみ、セクター内部へ侵入することが可能である。

現在、セクター・ヴィータは最高責任者である統括官と、その補佐であるルピナスによって共同管理されている。セクター・ヴィータは研究セクターであると同時に、前線へ向かう兵士たちの中継拠点でもあり、各セクター（セクター1、セクター2など）には戦闘部隊が配備されている。

セクター内部は、研究区画・居住区画・医療区画・出撃区画など、明確な役割を持つ区画に分割され、厳重に管理されている。

過激派アンドロイド

もともとアンドロイドには、人間へ危害を加えられないセーフティ機能が備わっていた。

しかし過激派は、その制限を自ら排除することで、人間への敵対行動を可能にした。

その後、人間に似せた外見を捨て、戦闘に特化した身体へと再設計している。

現在の異形の姿は、対人セーフティを解除した存在であることの象徴でもある。

彼らは、通常のアンドロイドと同じく心臓部に《コア》を持つ。コアは高い硬度を備えており、刃物による攻撃では損傷を与えにくい。場合によっては、攻撃側の刃物が損傷することもある。そのため、過激派との戦闘では、コアを破壊する手段として銃弾以上の威力が有効とされる。

また、鹵獲や解析を防ぐため、自爆機能を搭載している。そのため、彼らのコアを流用することはできない。過激派は数百年前より人類と交戦を続けており、最終目的は人類の完全な絶滅にある。

STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP

次ページ以降は指示があるまで開かないでください。

STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP

登場人物　（公開情報）

アレク・ヴァレン
研究者



エヴァ・ソリス
遊撃兵



グレイ・ノア
参謀



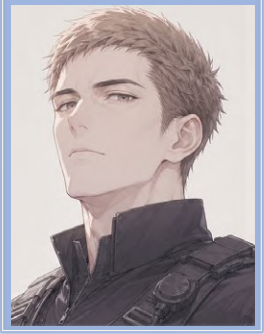
ディーン・カルダー
突撃兵



クララ・ヴァレン
オペレーター



フリッツ・クライン
工作員



バーバラ・ロウ
カウンセラー



統括官　/　ルピナス
NPC



進行（公開情報）

序幕（４０分）
- キャラクター選択
- キャラクターブック読み込み　４０分

第一幕（２５分）
- 読み合わせ①
- 読み込み　１分
- 第１セット　調査７分
- 第２セット　調査７分
- 第３セット　調査７分

第二幕（５０分）
- キャラクターブック読み込み　２０分
- 読み合わせ②
- 第１セット　調査５分＋議論７分＝１２分
- 第２セット　調査５分＋議論７分＝１２分

第三幕（６０分）
- 第１セット　調査５分＋議論７分＝１２分
- 第２セット　調査５分＋議論７分＝１２分
- 第３セット　調査５分＋議論７分＝１２分
- 第４セット　調査５分＋議論７分＝１２分
- 全体議論　１０分

終幕
- 推理発表（最大２分×７人＝14分）
- 投票
- エンディング